

那珂 72

— 那珂遺跡群第145次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1261集

2015

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面し古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、豊かな自然と文化が残されています。その中でも博多区は大陸との交流で古くから栄え、遺跡も多く存在しています。これらを保護し、未来へと伝えていくのは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化による市街地の拡大により、その一部が急速に失われつつあることもまた事実です。福岡市教育委員会は開発によってやむを得ず失われていく遺跡について、事前の発掘調査を行い、記録の保存に努めています。

今回報告する那珂遺跡群の発掘調査報告書は東光寺第3雨水幹線築造工事に伴う調査成果についての記録です。この調査では近世後期から近代の集落と溝を確認しました。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として御活用頂ければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対して心から謝意を表する次第であります。

2015年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 酒井 龍彦

例言

- 本報告書は博多区竹下5丁目62番1号の東光寺第3雨水幹線築造工事に伴って2013年7月1日から7月25日にかけて発掘調査を行った那珂遺跡群第145次調査の報告書である。
- 本書に収録した発掘調査は福岡市経済観光文化局の屋山洋が担当した。
- 遺構・遺物実測、遺構・遺物の写真撮影は屋山が、遺物実測を大庭友子が、製図等を濱石正子・屋山が担当した。
- 本書で用いた方位は磁北である。
- 本書に掲げる図面・写真・遺物など一切の資料は福岡市立埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

遺跡調査番号	1312	遺跡番号	0085	分布地図番号	037東光寺
調査地地番	福岡市博多区竹下5丁目62番1号				
開発面積	108m ²	調査面積	79m ²	調査原因	東光寺第3雨水幹線築造
調査期間	20130701～20130725		担当者	屋山 洋	

那 珂 72

— 那珂遺跡群第145次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1261集



遺跡略号 NAK-145
調査番号 1312

2015

福岡市教育委員会

本文目次

I.はじめに	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の組織	1
3 調査区の立地と環境	1
II.調査の記録	
1 調査の経過	3
2 調査の概要	3
3 遺構と遺物	3
1) 溝	3
2) 土坑	10
3) 掘立柱建物	10
4) 包含層	12
5) その他の遺物	12
4 小結	14

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
第2図 調査地点位置図 (1/4,000)	2
第3図 調査区位置図 (1/400)	4
第4図 調査区全体図 (1/120)	5
第5図 SD007・066・071土層実測図 (1/40)	6
第6図 溝出土遺物実測図 1 (1/3)	7
第7図 溝出土遺物実測図 2 (1/3)	8
第8図 溝出土遺物実測図 3 (1/3)	9
第9図 土坑実測図 1 (1/40)	11
第10図 土坑実測図 2 (1/40)	12
第11図 掘立柱建物実測図 (1/60)	13
第12図 出土遺物実測図 (1/3・053は1/1)	14

図版目次

図版 1	1. 調査区全景 (北東から)
図版 2	1. SD007・066・071 (北西から) 2. SD007・066・071土層 (南東から)
図版 3	1. 調査区西側部分 (北東から) 2. SK001 (南から) 3. SK001土層 (南から) 4. SK046 (北から) 5. SK080 (北から) 6. SD007漆膜出土状況 (南から) 7. 調査前状況 (東から) 8. 調査前状況 (北から)

I. はじめに

1 調査に至る経緯

平成25年（2013年）4月30日付けて道路下水道局建設部東部下水道課から博多区竹下5丁目、那珂1丁目、東那珂1丁目地内の東光寺第3雨水幹線築造に伴う埋蔵文化財有無の事前調査依頼（25-1-33）が提出された。これは近年多発するゲリラ豪雨等により竹下5丁目の一部の低地部分で排水が追いつかず床上浸水等が起きており、その対策として排水管を竹下5丁目から御笠川まで通すものである。排水管の通る竹下駅前線は既に発掘調査が終了しているため、発進立坑を掘削する竹下5丁目62番1号のみを調査対象とした。調査中は工事関係者をはじめ多くの方々の協力を得た。記して感謝したい。

2 調査の組織

調査主体 福岡市教育委員会（発掘調査 平成25年度：整理報告 平成26年度）

調査統括 福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課

埋蔵文化財調査課長 宮井善朗（平成25年度）

常松幹雄（平成26年度）

同課調査第2係長 櫻本義嗣（平成25年度）

同課調査第1係長 吉武 学（平成25年度）

庶務 埋蔵文化財審査課管理係 川村啓子（平成25・26年度）

調査担当 埋蔵文化財調査課 屋山 洋

埋蔵文化財審査課事前審査係 松尾奈緒子（平成25年度）

作業員 石川洋子 北条こず江 吹春憲治 桑原美津子 増田ゆかり 中村桂子

岡部安正 芹川淳子 中村健三 竹内武俊 林春治郎 鷺津真二郎 高手與志子

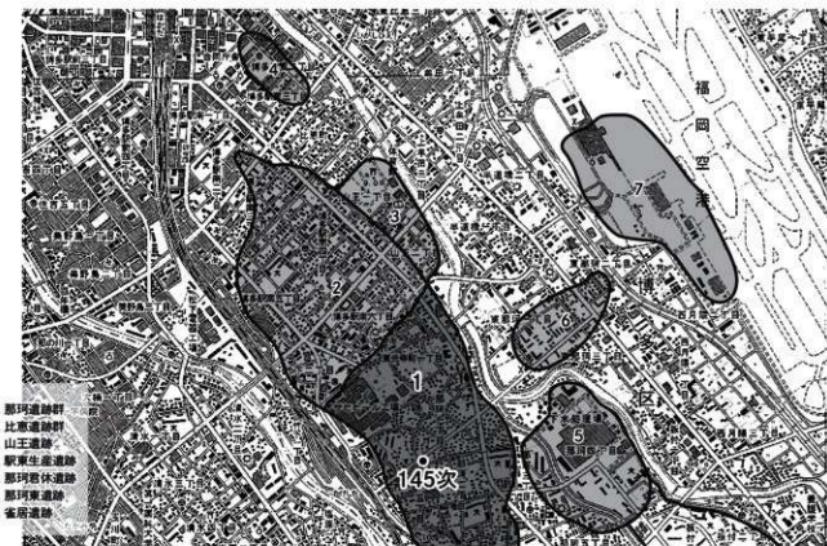
穂園さやか

整理作業員 坂口龍子

整理技能員 大庭友子 濱石正子

3 調査区の立地と環境

調査区は那珂遺跡群の西縁に近く、本来は西側に傾斜する斜面上に位置する。第3図で示したとおり周辺では発掘調査が多く行われており、北側が19次、東側が62次、西側が65次、南側では127次調査が行われている。近隣の調査では弥生時代から古代の遺構が多く出土しており、なかでも62次調査では古墳時代前期の方形周溝墓が出土し、那珂八幡古墳に埋葬された被葬者に関連する墓域であったと考えられる。北側道路の19次やその北側に接する105次調査などでも古墳時代から中世の遺構が出土しており、19次調査では古代の井戸の他に土壙43から16世紀中頃の銘文が刻まれた硯と共に染付碗や備前の壺、木製品などが土坑から一括して出土している。105次では古墳時代後期の竪穴式住居が数軒出土する他、古墳時代後期から古代、中世、近世各時期の井戸、中世後半の大型土坑などが検出されている。第3図でアミカケした溝は15～16世紀以降の溝とされているが（『那珂58』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1121集 P6 Fig3による）、中世後半の大型土坑が館跡に伴って発見される例が多いことから、本地点においても中世後半以降の屋敷地が存在する可能性が高いとされている。



第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

■は那珂遺跡群の範囲（2014年10月現在）



第2図 調査地点位置図 (1/4,000)

II. 調査の記録

1 調査の経過

調査対象地は竹下5丁目62番1号である。調査は掘削する立坑部分の108m²を対象とし、敷地中央部の北側道路寄りにあたる（第3図）。立坑周辺は掘削を伴わないので調査対象外とした。また調査時には道路際にベルト状の残地をとらざるを得なかつたため実際の調査面積は79m²である。調査は7月1日に機材の搬入、2日に表土剥ぎと遺構検出を行った。表土剥ぎは事前の確認調査の結果を受けて以前の建物基礎で攪乱されている地表面から約70cmの深さまで重機で掘り下げ、鳥栖ロームの上面で調査を行った。3日は東側の溝から掘り下げを始め、その後西側に移動しながら柱穴群を掘り下げた。乾燥によるロームのひび割れが激しかったが、申請地には水道が無かったため那珂整理室から1日に3～4回水を運んで散布した。7月19日に遺構の掘り下げがほぼ終了し22日に全景写真を撮影、その後残りの掘り下げを行って23日に調査が終了。24日は埋め戻しと片づけ、25日に機材の搬出を行つて発掘調査が終了した。

2 調査の概要

調査区内で溝を11条、土坑10基、柱穴状遺構多数を確認した。すべての遺構は近世後半から近代以降に属するもので、周辺調査区で多くみられる弥生時代～中世などの古い遺構は確認できなかった。前述した様に北側隣接地の19次や105調査では古墳時代以降の竪穴住居等が出土しているが、これは調査区西半部に限られ、145次調査が面する東半側では近世末以降の時期に限られる。これは19次や145次とその東側の32次や62次の間に段差A（第3図）があり東側が1.2cmほど高い。更に東側20mの地点にも段差がみられ、現在は垂直な崖面になっているが、これは西側に緩やかに傾斜する斜面を中世後半から近代にかけて造成して平坦面を広げた結果と考えられ、弥生時代から中世までの古い遺構はその際に消滅したものと考えられる。

溝のうち3条（SD007・066・071で近世後半～近代に属すると考えられる）は調査区の東端に集中しており、新しい溝ほど東側に移動している。これは当初境界に若干の傾斜が残っていたものを溝を掘り直すごとに削って平坦面を広げて現在の垂直な崖面になった過程を表しているものと思われる。土坑と柱穴群は調査区の中央から西側で多く出土した。柱穴群は掘方径に比べると深さが深いものが多く、深さ40cmを超えるものが多い。柱痕跡はほとんどみられず、埋土は粘性で締まりがない。遺物は多く出土したが、そのほとんどは弥生時代～中世の土器片で周辺からの流れ込みと思われる。

3 遺構と遺物

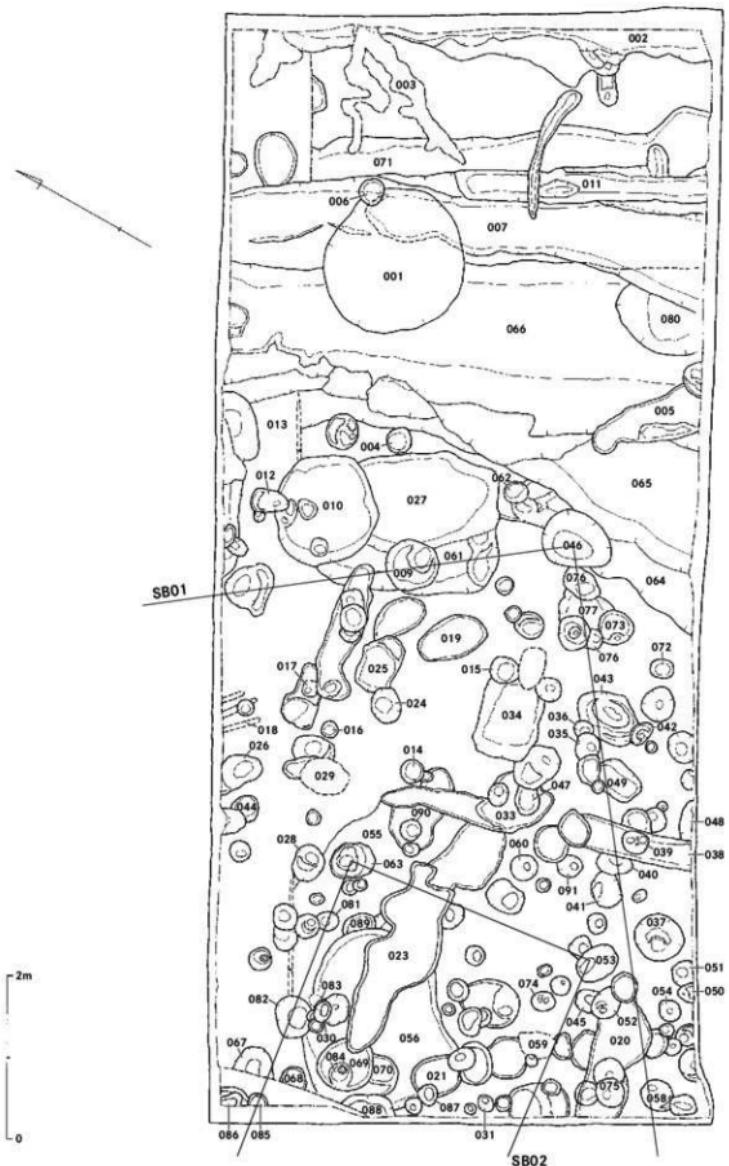
各遺構から出土した遺物に関してはP15の表1に記載している。

1)溝 SD007・066・071の3条は等高線に沿つており、調査区内では方位N-60°・Wを測る。上層では同一遺構として掘り下げ途中で3条に分けた。3条の上層掘り下げ時に出土した遺物は008とした。

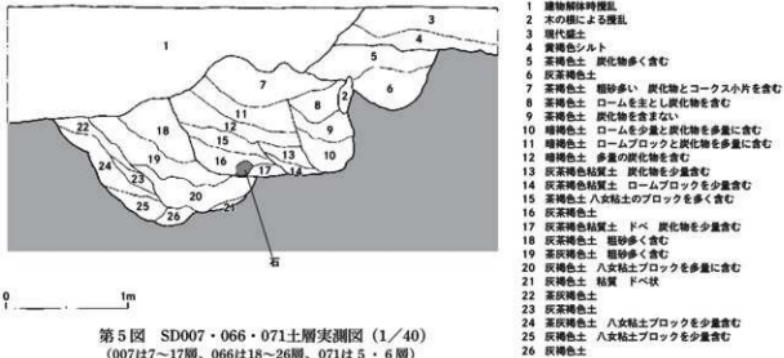
SD007（第4・5図） SD066を切り、SD071に切られる。幅1.5m、検出面からの深さ90cmを測り、断面は逆台形を呈す。埋土はレンズ状の堆積で主に暗褐色から灰茶褐色を呈し、最下層の16・17層は粘性が強く、炭化物を含む。一度15層まで埋没後に溝の東側を堀直して（13・14層）。13層も灰茶



第3図 調査区位置図 (1/400)



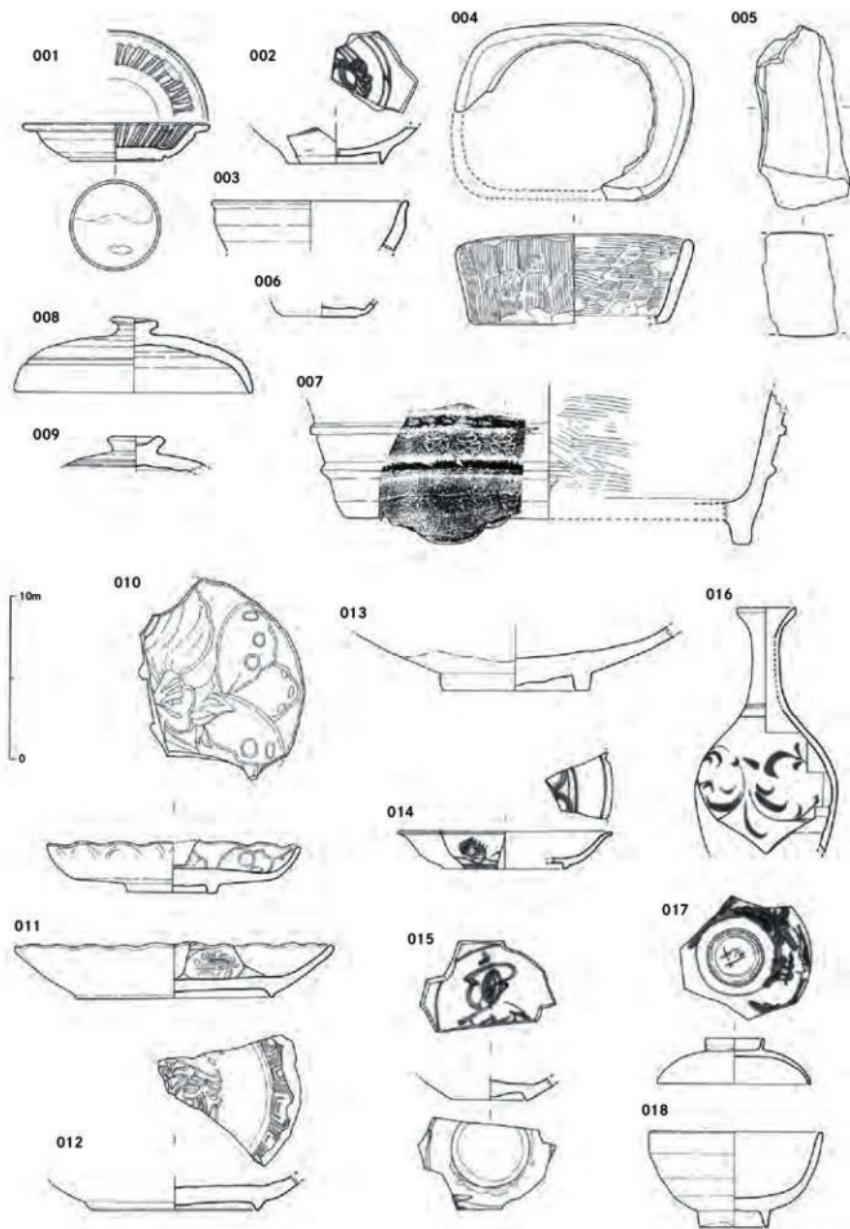
第4図 調査区全体図 (1/120)



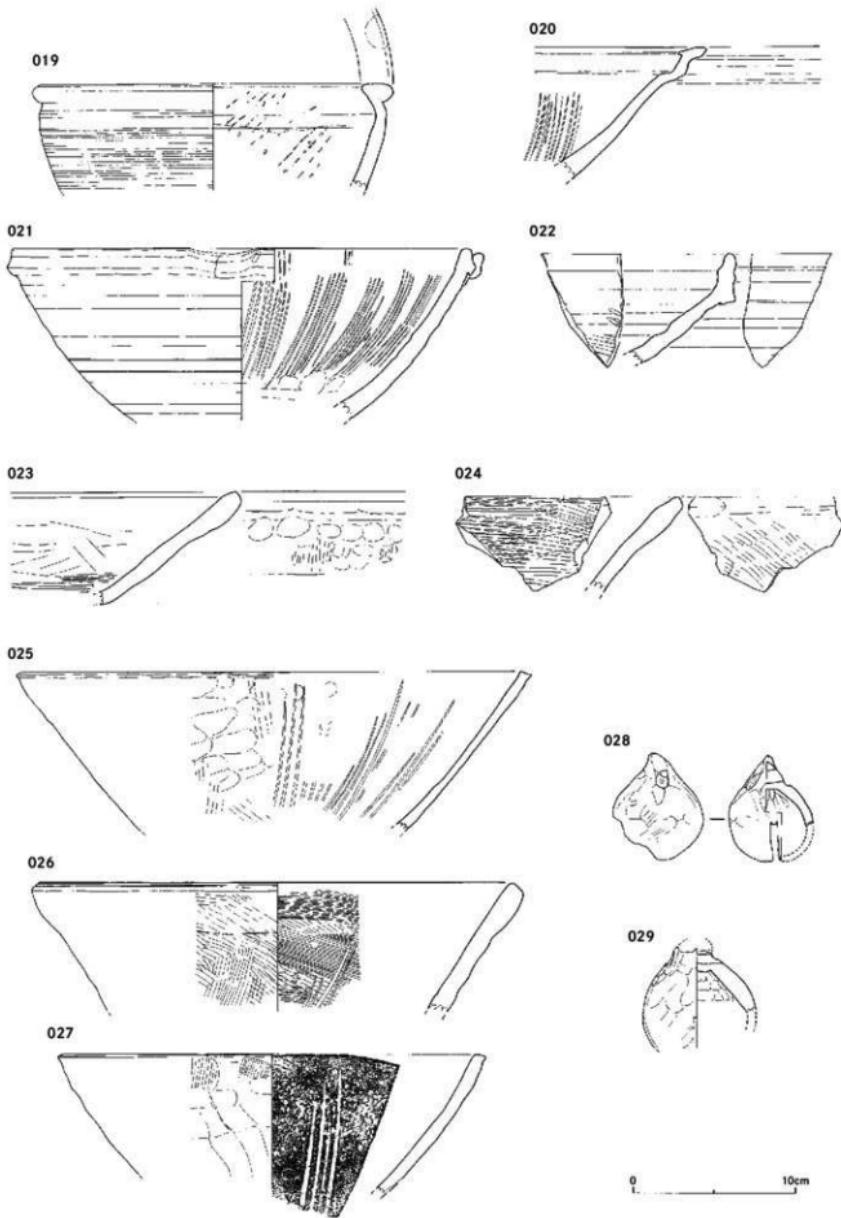
第5図 SD007・066・071土層実測図(1/40)
(007は7~17層、066は18~26層、071は5・6層)

褐色で粘性が強く炭化物を少量含む。溝がほぼ埋没した後、更に東端を掘り直している(8・9・10層)。出土遺物(第6~8図 010~035)。010は白磁皿で内面はスタンプで花文を施す。豊付以外は釉を施す。011・012は青磁皿である。012の釉は青緑色で中央に花文のスタンプと縁に雷文を施す。013は陶器盤で胎土は茶褐色で粗い。内定部は露胎で十文字に釉を施す。014~017は染付磁器の皿と徳利と蓋である。018は陶器碗で釉は灰褐色と灰白色の渦巻き状をなす。外面は発泡して白色を呈す。019は陶器鉢、020~022は陶製擂鉢、023・024は土師質の鉢もしくは鍋、025~027は土師質の擂鉢である。028・029は土鉢で橙色を呈し、全体に指ナデを施す。030・031は瓦質、032・033は土師質の茶釜である。034は土師質丸瓦で橙色を呈す。035は淡橙白色の石で表面に擦痕が多く残る。その他に古墳時代の移動式竈片、須恵器壺や中世後半以降の青磁の碗や大皿、土師質の土鍋、茶釜、三足付土鍋などが出土した。

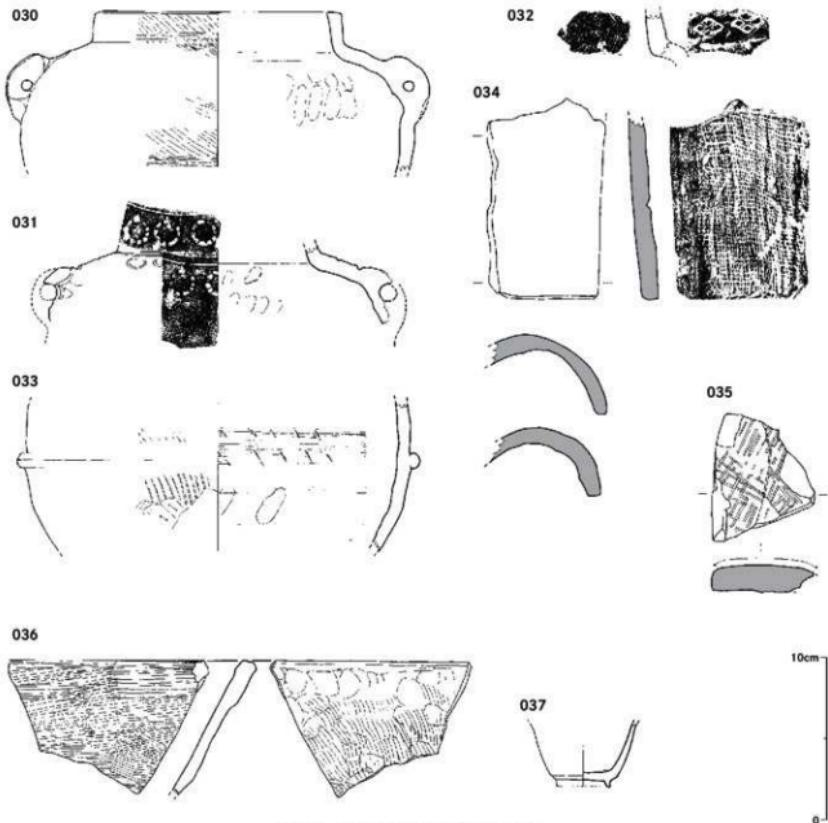
SD066(第4・5図) SD007に切られる。3条の中では最も古い。断面でみると2条に分れるが、掘り下げ中は同一の溝と認識して掘り下げる。報告では066aと066bとする。066aは第5図の22~26層で断面逆三角へ逆台形を呈し、推定幅1.4m、検出面からの深さ1.5mを測る。埋土は灰褐色~灰茶褐色を呈し、流水や滯水していた痕跡はみられない。066bは第5図の18~21層で断面逆台形を呈し、推定幅1.5m、検出面からの深さ1.2mを測る。埋土は灰茶褐色~灰褐色を呈し、19層は八女粘土のブロックを多く含む。21層は灰褐色で粘性が強く、滯水していた可能性を示す。底を浚えた際の残りと思われる。出土遺物(第6図001~009)。001は陶器皿である。口径11.4cm、器高2.3cmを測る。釉は灰オリーブ色を呈するが被熱のため発泡しており、本来の色が不明である。胎土は淡褐色で、素地の上に白化粧土を施す。002は染付陶器碗である。胎土は淡褐色で青味かかった厚めの釉を高台部以外全面に施す。粗い貫入がはいり縞の濃淡で文様を施す。003は天目碗で復元口径12cmを測る。胎土は淡橙白色、釉は茶褐色を呈す。瀬戸焼きか。004は素焼きの鉢である。平面は隅丸長方形を呈し、復元長径は14.5cm、器高5.5cmを測る。にぶい黄橙色を呈し、全体に指ナデを施す。005は砥石である。上下両面を砥面とする。006は土師皿で底径4.5cmを測る。浅黄色を呈す。007は瓦質の火鉢である。灰黄褐色~暗



第6図 溝出土遺物実測図1 (1/3)



第7図 溝出土遺物実測図2 (1/3)



第8図 溝出土遺物実測図3 (1/3)

褐色を呈し側面に花文のスタンプを施す。008・009は須恵器壺蓋で灰色を呈す。008は復元口径14.6cm、器高4.6cmを測る。009はつまみが大きく径3.6cmを測る。その他に須恵質の壺と大甕、瓶、瓦質の擂鉢と短口壺、瓦、土師質の擂鉢、壺、釜、土鍋、瓦が出土した。

SD071 (第4・5図) SD007を切る。第5図の5・6層で断面は逆三角形を呈し、現存幅110cm、深さ54cmを測る。埋土は茶褐色～灰茶褐色を呈し、上層は炭化物を多く含む。灌水・流水の痕跡はみられない。出土遺物 (第8図 036・037)。036は土師質捏鉢である。外面は暗茶褐色を呈し、粗いハケ目を施す。全体に指オサエによる凹凸が残る。内面は灰褐色と灰茶の斑で細かな横ハケを施す。胎土は淡黄白色を呈す。037は白磁猪口である。037は胎土白色を呈し、極めて薄い透明釉を施す。全面に施釉後に高台疊付部のみ掻き取る。その他に陶器甕の底部が出土した。近世以降と思われる。

2) 土坑 調査区内で6基確認した。

SK001(第9図) 調査区東端に位置する。SD007・071を切っており近代以降である。平面はやや東西に長い不整円形を呈し、長径181cm、短径167cm、深さ46cmを測る。西端に段がつく。埋土は灰黄褐色土と茶褐色土が不規則に混じる。出土遺物(第12図038～042)。038・039は染付磁器碗で039は赤色で花文を描く。040は陶器碗で暗赤褐色を呈す。041は陶製壺で茶褐色を呈し外面は幅1mm程度横方向に搔き取り、波文を描く。042は土師質大型火鉢である。その他磁器製の皿、猪口、小壺や陶製の皿、鉢や七輪等が出土した。

SK010(第9図) 調査区中央からやや東側に位置する。平面はやや東西に長い歪な円形で長径131cm、短径127cm、深さ15cmを測る。底面に2基の柱穴状掘り込みがあるが、010より古い遺構の可能性がある。埋土は暗茶褐色土を呈す。遺物は青磁片と、12～13世紀の白磁片、土器片4点が出土した。001と様相が似ることから近現代と思われる。

SK027(第9図) SK010に切られ、SK061を切る。平面は隅丸の長方形を呈し、長径203cm、短径117cm、深さ40cmを測る。主軸はN-60°-Wを測る。埋土は灰茶褐色を呈し、2～5cmのロームブロックを多く含む。遺物は染付皿と思われる1点の他、白磁片、SD071と同一固体と思われる陶器片、須恵器坏蓋、土師質擂鉢、土師皿などが出土した。

SK034(第9図) 調査区中央部のやや西寄りに位置する。平面形は東西に長い長方形を呈し、長径108cm、短径75cm、深さ32cmを測る。断面は逆台形を呈し埋土は暗灰褐色を呈す。遺物は陶器小片1点と土器小片12点が出土した。詳細な時期は不明である。

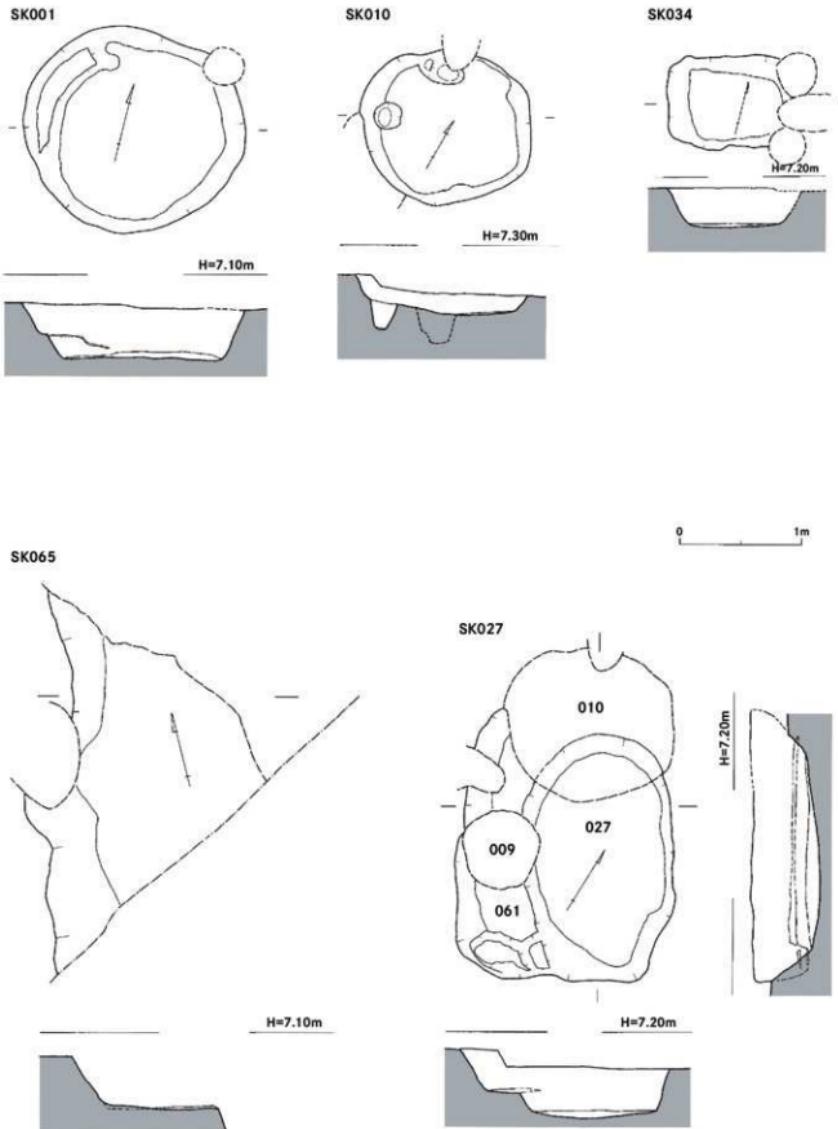
SK056(第10図) 調査区の西端に位置し、遺構の西側が調査区外に延びる。平面は東西に長い不整形で、現状で東西230cm、南北178cm、深さ14cmを測る。断面は浅皿状で埋土は明褐色を呈す。近世～近代と考えられる。出土遺物(第12図043・044)。043は染付磁器碗である。胎土は白色で黒色粒を多く含む。釉はやや灰色を呈す。外面に紺の濃淡で横線と花文を描く。044は土師質で蓋と思われる。その他に須恵器大甕、土師質坏蓋、土師質の擂鉢と捏鉢、弥生時代の甕片などが出土した。

SK065(第9図) 調査区中央部から南寄りに位置する。SD066に切られる。土坑としたが127次のSD02の続きである可能性もある。現状で西縁は南北方向を向き、深さ54cmを測る。遺物は磁器碗片1点、陶器碗片2点、土師質擂鉢、土師坏、土鍋等が出土した。いずれも小片で時期は不明である。

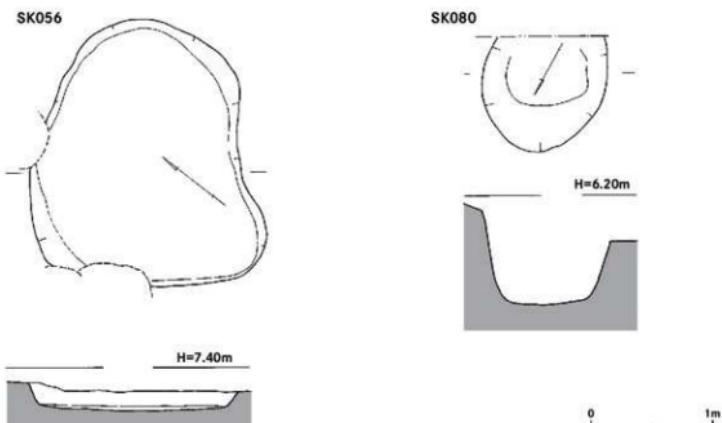
SK080(第10図) 調査区の東南側、SD071の底面で検出した。平面は円形を呈し、南端が調査区外に延びる。径103cm、深さ81cmを測る。埋土は灰褐色で粘性が強い。遺物は土師器捏鉢や須恵器片などが出土した。

3) 挖立柱建物 挖立柱建物になる可能性がある柱列を2棟報告する。

SB01(第11図) 調査区西半に位置する。調査区内では2×2間であるが、調査区の北側と西側に延び2×3間程度になる可能性がある。主軸はN-50°-Eを測り、梁間は4m、桁行は5mを測る。柱間は南北が2m、東西が2.3～2.5mを測る。出土遺物(第12図045～047)。045はSP037から出土した素焼きの土器片である。外面は淡橙色を呈し、文様等はない。内面はタール状のものがこびり付き、暗茶～黒色を呈す。全体に粗いハケ目状の沈線がみられる。046・047はSP046から出土した。046は染付磁器碗の口縁で半透明の釉を施す。内外面に薄い紺で線を描く。047は土師皿である。047は口径



第9図 土坑実測図1 (1/40)



第10図 土坑実測図 2 (1/40)

8.2cm、器高1.3cmを測り、にぶい黄橙色を呈す。口縁に煤が付着し打明皿として使用している。

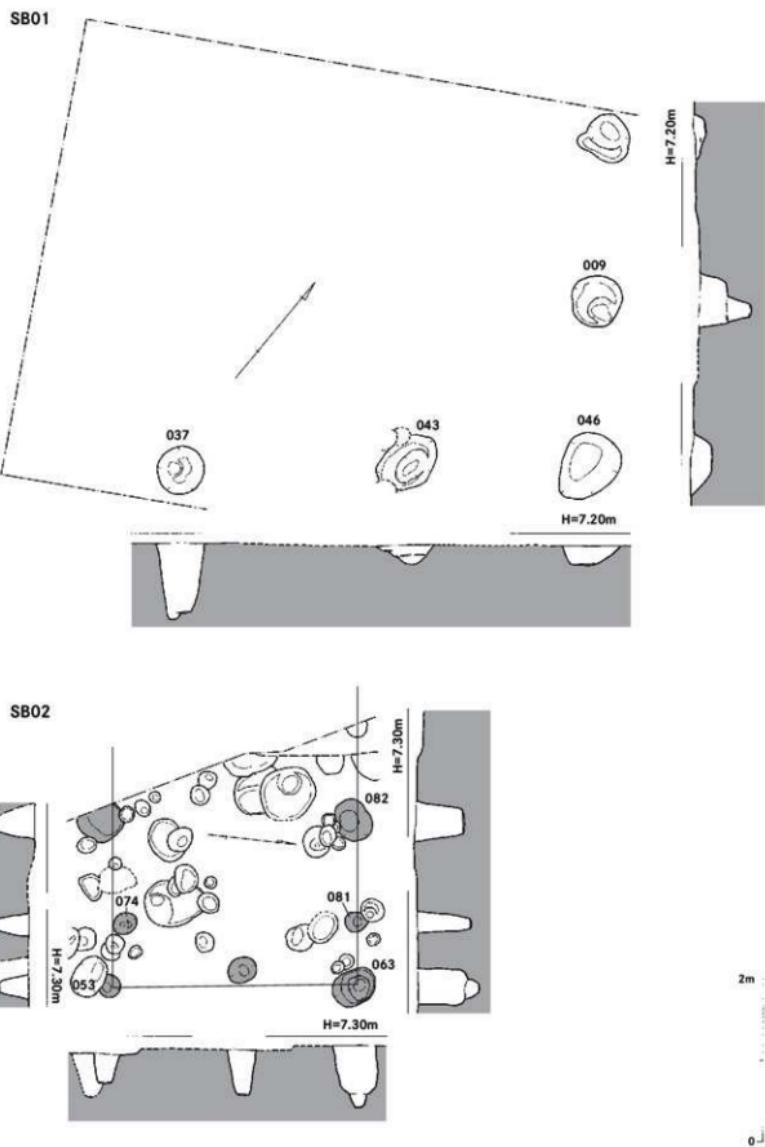
SB02 (第11図) 調査区西端に位置する。現状は1×1間の南北に長い建物であるが、調査区の西側に延びて東西方向の建物になる可能性がある。主軸はN-8°-Wを測り、東西が2m、南北が3.2mを測る。柱穴は径50～60cmの楕円形を呈し、深さ53～67cmを測る。各柱穴間に径30cm前後の柱穴があり(074・081等)、柱間の中央には位置しないものの建物に伴う柱穴である可能性がある。出土遺物(第12図048～050)。048・049はSP057で出土した磁器碗で050はSP082から出土した陶器小碗である。胎土は白色で半透明の釉を施す。050は釉が灰オリーブ色で細かな貫入がみられ内面全面と外面口縁に施釉するが、ムラが多く内面でも一部露胎部分がある。露胎部は暗黄赤褐色を呈す。

4) 包含層

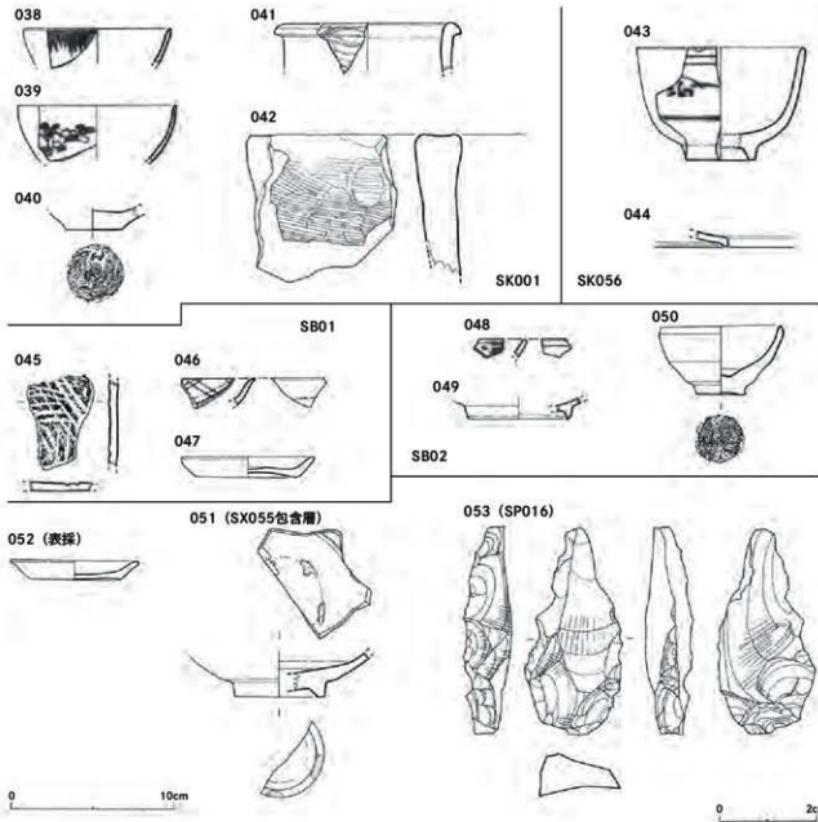
SX055 調査区北西隅に位置する。厚さ3cm程の黒色土層が東西2.5m、南北1.5mの範囲に広がる。当初弥生時代の遺構の残れである可能性を考えたが、遺物の多くは近世以降の陶磁器片である。出土遺物(第12図051)。051は白磁碗である。釉は半透明でやや青みを帯び、細かな貫入が入る。全体に施釉し、高台疊付と内底部に目跡が残る。他に白磁片(12～13世紀)、陶器片、須恵器片、瓶取手などが出土した。

5) その他の遺物

第12図052は土師皿で遺構検出時に出土した。復元口径7.8cm、器高1.1cmを測る。橙色を呈す。胎土中に0.5～1mmの白色砂を少量と、雲母片と赤褐色小粒を多量に含む。外面口縁に煤が付着しており打明皿として使用している。053は黒曜石製ナイフ型石器である。剥離面先端に新しい剥離が並ぶ。全長4.2cm、幅2.0cm、重さ5.1gを測る。



第11図 摂立柱建物実測図 (1/60)



第12図 出土遺物実測図 (1/3・053は1/1)

4 小結

今回の調査では近世後半から近代の集落と溝を確認した。北側隣接地の19次と南側隣接地で出土している中世の溝（第3図）は本調査区の中央部を通るはずであるが、確認できなかった。近世～近代の溝に切られているSK065がその残穴である可能性もあるが、詳細は不明である。溝の西側で出土した柱穴群は径に比べて掘方が深い。深さ30cmを超えるものも多く、中には90cmに達するものもある。土色は灰褐色、暗茶褐色、茶褐色、明褐色と様々である。柱穴群から出土した遺物は小片が多く、時期が判明する遺物はほとんどないが、その埋土は締まりがなく軟質で、他の調査区で出土した弥生時代～中世の遺構とは異なるため、溝と同様に近世後半～近代に属する可能性が高いと考えている。

遺物出土遺攜一覽表



調査区全景（北東から）



1. SD007・066・071 (北西から)



2. SD007・066・071 土層 (南東から)



1. 調査区西側部分（北東から）



2. SK001（南から）



3. SK001 土層（南から）



4. SK046（北から）



5. SK080（北から）



6. SD007 漆膜出土状況（南から）



7. 調査前状況（東から）



8. 調査前状況（北から）

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1261集

那珂72

- 那珂遺跡群第145次調査報告 -

2015（平成27）年3月25日

発行 福岡市教育委員会
〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 松古堂印刷株式会社
〒819-0373 福岡市西区周船寺1丁目7番64号

報告書抄録